

2020 年度をふりかえって

RSL センターセンター長
逸見 敏郎

2020 年 4 月。キャンパスから学生の姿が消えた。

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のパンデミックにともなう本学のキャンパスへの入構禁止措置のためである。キャンパスに学生がいない、その光景に多くの勤務員は戸惑ったに違いない。もちろん私もそのひとりであった。この状況を見た先輩教員は、「大学紛争(大学闘争)」のキャンパスロックアウトを思い出すと呟いた。

いつもなら、喧噪であり苦情のひとつも漏らしたくなる学生のクラブやサークルの新歓行事もなく、いつもなら、休み時間に教室から出てきた学生たちの間をかき分けながら授業の教室に向かうこともない。さらに 2020 年度は授業開始が 4 月 30 日からとなり、この間にオンライン授業の準備が急ピッチで進められた。

2020 年度はこのように「いつもなら」が何の前触れもないまま消失することから始まった。

さて、自分にとっては歴史の 1 ページでもある日本の高度経済成長期にあたる 1960 年代末の「大学紛争」は、ベトナム反戦運動・第 2 次反安保闘争と同時に、ある意味で大学が社会から隔絶され研究という名の自己閉塞的なあり方に対しての大学生のプロテスト、異議申し立てであったと言える。いわば大学生が大学のあり方を根本的に問い直す行動であった。この経験を経て本学では、人文学の再創造を目指し、学問領域横断の研究と教育を目的とする「文学部研究センター(現、人文研究センター)」設置(文学部)や社会人が再度大学で学ぶ機会をひらく先駆けとなった「社会人入試」(法学部)など先進的な改革がおこなわれてきた。

近年は、大学と社会の壁をいかに低くするか、大学と設置場所の地域との関係をいかに学生の教育に取り込んでいくかといった観点が一般化してきている。これは大学だけでなく高等学校の教育でも探求学習のなかで社会とつながる学びに注目が集まっている(例えば『キャリアガイダンス』Vol. 431)。立教サービスラーニング(RSL)センターは、社会とのつながりの中でシティズンシップの涵養を目的として学生の教育を行う本学における先端にある組織といえよう。しかし、COVID-19 のパンデミックにより社会的健康を守るため、人と人との関わり、他者と関係性を切り結ぶ行為そのものが制限されることとなった。ICT の活用により講義科目はオンラインで行うことができるようになったが、社会的な課題のある場に赴き、自分自身の五感を通した学びを重視する RSL 実践系科目は、従来の方法で実施することがほとんどできなくなった。そのなかで秋学期のコミュニティ系の「池袋」および「埼玉」、ローカル系の「南魚沼」は担当教員の創意工夫によりオンラインを併用しながら実施することができた。これは活動先フィールドを熟知し、学生への学びのポイントを明確にする授業担当者の科目内容の深い理解によるものであろう。実習やインターンシップなど学生の体験を伴う科目は全学的に見ても授業実施が困難であったとの報告がなされているが、これらの科目の授業実践はひとつのモデルとなるものとも言えよう。そしてこの創意工夫の成果は 2021 年度の RSL 科目に活かしながら、COVID-19 下での RSL 科目を受講する学生の学修成果につなげていきたい。

RSL 科目担当教員および RSL 科目履修学生を受け入れ、学生の教育の一端を担っていただいている受け入れ先団体の皆さまには、心より御礼を申し上げます。

【註】

- ・立教大学の 1960 年末の「大学紛争」は『写真で見る立教学院の歴史』を参照
https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/rikkyo_archives/photo/06.html
- ・『キャリアガイダンス』 Vol. 431(2020.2), リクルート、は以下を参照
http://souken.shingakunet.com/career_g/2020/02/vol143120202-6eae.html